

終章

平成二十七年十月六日追記

正史の疑いを物証ただで糺す

古代史の研究は、偽作された記紀や続日本紀の記述を他の考古史料や物的証拠と突き合わせながら検証する必要がある。つまり、文献史学的手法だけでは解き明かせないものである。

先学諸氏のこれまでの研究は、「記紀」の恣意的しいてな解釈のみで論考されたものが多く、それが通説として罷り通っているところに大きな問題を残している。

「書紀」や「続日本紀」は、日本の正史ではある。当時の政権が、人材や公費を使って長年かけて書かれた公式な史料である。ところが、正史は正しい歴史書ではないことは本書の各章で指摘、論証した。

書かれた時代背景からみて、当時の政権に都合良く書かれていること。つまり、正史は政権を乗っ取った人々による一種の偽証的な啓蒙書である。

国民の目を欺き、自身の正統性を強調するために正史

が利用されたとみる他ない。政権に不都合なことは隠され、省かれ、しかも史実ではない造作説話が数多く挿入されていることも分かった。

ところが、日本の史学界では正史と歴史を混同されてきたところに問題がある。

文献としての正史や、その立場で書かれた史料が正しいとする解釈にたつと、真の歴史を追究することは出来ない。多くの在野研究者がこれまでも重要な史実を指摘してきたが史学や考古学を本務とする人たちは、それを検証しないばかりか無視している。史学を本職とする人たちは、これまで罷り通ってきた論説を覆されることを恐れていることであろうか。

多くの史学者の論考をみたとき、文献史学や考古学界の縄張根性から、学際的な協調に欠けていることを痛感する。

史実・真相の究明には、少なくとも現在レベルの研究環境で得られるあらゆる科学的知識技術を総動員して検

証しなければ史学や考古学領域だけで解明できるものではない。

筆者は、科学の基本は懐疑主義にあると思っている。物証や証明のできない理論や解釈は信じられないとするのが科学の基本姿勢である。あらゆる懐疑を突き崩せるのは論より証拠である。

ただ、和国・日本国（ひのこ）・大和国の建国に活躍した須佐之男尊や饒速日（大歳）尊の偉業を巡る証左は正史から完全に消され、おまけに歪曲した造作説話で誑（たぶらか）かされている。したがって、正史に残された微かな痕跡と神社伝承や考古史料から類推するしかなかったことをお断りしておく。筆者は農学研究の立場から、新しい技術や製品・品種を作り出したり、解らなかつた事象を分かるようにする、また、目に見えないものを見えるようにする、といった研究を長く続けてきた。

例えば、人の目では見えない果実の中身、食べて見なければ分からない甘味や酸味を電磁波の特性を応用して

非破壊で瞬時に測定する研究開発で、個々の果実の選別を実用化した。それには、多様な果実の形質・組織や生態特性等のもとより、化学・光学・工学・物理学・数理統計学、等々の知識技術を総動員しなければならず苦労も多かった。その筋の専門家の意見や支援を多とした。

つまり、学際的な連携研究と、その成果を総動員することで初めて我が国初の光センサーによる味の自動選別機の実用化に成功し、いま全国の果樹産地の選果場で実用されている。

正史や文献史料だけに踊らされ、目に見えなくなった古代を追究するに当たり、古文獻や考古遺物の発掘史料はもとより、コンピュータ画像解析によって解読された古代人物の墓誌、歴史の生き証人とも云える古神社の祭神や縁起・伝承、寺院の縁起や祀られた位牌にまで物証を求めた。

その結果、これまで史学界で罷り通ってきた誤った通説に物証をもって風穴を開け、真の古代史に近づくこと

が出来たと自負している。依って、書名を「古代日本原記」と名付けた。

とはいえ、これで古代史の研究は完成したとは思っていない。新たな物証を探し求め、検証しながら補完していくつもりである。本書を読んでいただいた方々のご指摘やご意見も期待している。

歴史に拘っているだけでは展望は開けない

ところで、日本が植民地にしたとして、いまだに中国が非難する満州国(中国東北部)も、その昔は高句麗(高句麗)国だった。668年に当時の中国唐が戦力で占領したものだ。また、後世、清の時代、満州事変後の昭和七(1932)年、

日本軍が清朝最後の皇帝だった溥儀を執政にたてて独立させて満州国を承認し、同九年以降、帝政となったのものである。

国際摩擦の度に、歴史認識を持ち出す韓国や北朝鮮も、かつて朝鮮半島の百済族が渡来して飛鳥・奈良時代の大

和王朝を乗っ取った歴史を知ってのことであろうか。

弥生時代には、半島からの渡来人は約十万人、古墳時代には二百六十七万二千人と推計され⁴⁸⁾、日本列島の先住民と混血して出来上がったのが日本人である。

太平洋戦争末期の昭和20(1945)年、アメリカの原爆投下で壊滅的に負けた日本は、国民の飲まず食わずの復興努力と、アメリカ等の支援もあって復興した。しかし、やはり今も実質的にはアメリカの支配下に置かれている。

政府は日米協調を旗印にしているが、米軍基地や貿易問題等を梃子に、何かと内政干渉を続けているし、ロシアも占領した北方領土はいまだに手放さず、実効支配している現状である。

とかく、利害の対立しやすい隣国間は、政治・外交・領土問題・経済摩擦で、ぎくしゃくした問題が多い。

古代も今も、その状況は基本的に何ら変わらない。まさに、「歴史は繰り返している」現状を目の当たりにみる。ともあれ、中国や韓国とは、今はもう言語や文化は違

っても、ルーツは同じモンゴロイドである。過去の歴史に拘ることなく、小異を捨てて大同につき、共存共栄の道を探っていくことこそ、東アジアのみならず21世紀の人類に課せられた最大の責務ではないか。

隣国との諍いを繰り返している場合ではない。歴史に拘っているは新たな展望は開けない。

北朝鮮による人身拉致や核開発、日本海に向けたミサイル発射などの軍備増強、日韓・日中の領土問題、さらには危機が予測される昨今の地球環境の問題も、国際協調なしには到底解決し得ないものである。

かつて、小泉純一郎総理は、「日本は第二次世界大戦の反省と、その上に立って二度と戦争をしてはならないと心に誓い、犠牲になった多くの戦没者の冥福を祈り、決意を新たにする」として靖国神社に参拝した。

しかし、中国の指導者は、総理の靖国神社参拝を目の仇にして、予定していた日中首脳会談を破棄したりした。可笑しいではないか。会談や話し合いもせずに相互理

解も成り立ち得ないし信頼関係も生まれようがない。

会談によって靖国参拝問題も話し合えば、相互理解もまた深まろうというものである。中国は、隋や唐時代からの宗主国意識はいまだに直らないのであろうか。

「天下太平 萬民豊楽 同心協力 人心救済 萬靈感謝 祈禱冥福 乃至法界 平等利益」と、先人は説いているではないか。

本章は、大和朝廷を乗っ取った百済政権の悪行の数々を明らかにし、白日の下に曝け出すことができた。

政権が乗っ取られたことは歴史の流れとして認めなければならず、本書はそのことを問題視しているのではない。

史実を隠し嘘で塗り固めた「紀記」や、巧妙に史実を隠蔽した「続日本紀」以降の正史、それを検証もせずに歴史として国民に押しつけた日本の史学者や政府の過失は重大である。また「書紀」や「続日本紀」の編者、いや歴史を偽装して書かせた張本人らが憎いと云わざるを得ない。

今の日本の考古学は、縄文・弥生・古墳といった時代区分、発掘された土器や銅鐸・埴輪等の考古遺物の羅列ばかりで、そこに実在した筈の人間の姿が浮かばない。全国各地に多数実在する古墳の被葬者さえも解明できず、人間不在の遺物でしかない。

どこの国の歴史書も古代に活躍した建国の英雄譚えいゆうたんが生き生きと語られている。しかし「記紀」で捏造された「神代神話」や「神武東征」の創作物語りによって、それ以前の英雄たちの足跡はすべて曖昧にして封印されてしまった。残念ながらこの国の建国黎明期の歴史を胸張って語れなくなってしまうている。

しかも、大和朝廷を乗っ取った人々は、自身の出自を隠して正統性を主張しているのが憎い。偽装ぎさうした「記紀」や、「続日本紀」の巧妙な記述によって国民は騙し続けられた。その説話に洗脳された国民は、それが史実だと思いつつに頭から離れない。

洗脳とは、真理・史実まで歪めてしまう恐ろしいもの

である。

正史に史実を消されていった古代の人々の思いを再現し、後世に伝えていくことこそ歴史研究の使命と考える。

歴史に学べ

いつの時代になっても、政治家の資金偽装ぎさうや食品企業、流通業者による食品偽装ぎさうが後を断たず、世間を騒がせている。

だが、偽装ぎさうの歴史は、古く奈良時代の「古事記」・「日本書紀」に始まっていたのである。

偽装や法律違反を取り締まらねばならない政権・政府自身が、偽装した歴史を書き国民を欺いたのが正史だった。この国の古代の真相を知るには自国の正史だけでは当てにならず、他国の史書や墓誌の探索、また神社の縁起えんぎで、その真偽を糺たださなければならぬのは実に嘆なげかわしいと云わざるを得ない。

しかし、今となっては「記紀」や「続日本紀」を責めても

詮無せんないこと。歪曲わつさく、捏造ねつぞうされた背景を読み、如何に古代の真相を読み解くかが、歴史を追究する者に課せられた課題とも云える。

それにしても、「**記紀**」や「**続日本紀**」によって洗脳された我々の先入観や刷り込みの根の深さを痛感させられる。

「正史は常に政争勝者が書く」のが通り相場らしいが、迷惑して困るのは史実、真相を求めて学ぶ多くの一般国民である。太平洋戦争時の政府以来、現今の政府による公式報道も、政府の爲の広報で基本的に変わらない。

近頃は、義務教育の課程で日本の古代史をまともに教えないというのも、また教育行政の怠慢たいまんと云うほかない。

かつての日本の首相は、百年前の「日韓併合の不幸な歴史にお詫びする」として、幾度も謝るよりも、それ以前に韓人に乗っ取られたこの国の王朝の歴史を隠さず、日韓双方が歴史認識を共有しなければ、いつまでも両国の溝は埋まらない。

歪曲した「**記紀**」等、正史の偽装ぎさうで私たちは大怪我をす

ることはないとしても、この国の黎明れいめいの記録が失われ悔やまれてならない。国の建国史を胸を張って語れる国民にならねば他国から馬鹿にされる。

「歴史に学べ」とは云うが、歴史に拘こっているだけでは先は見えない。歴史を踏まえ、先行き不透明なこれからを見据えていく指針とすべきと示唆してくれているのであろう。

歴史とは、過去と現在の対話である。史実を明らかにするのみに非あず。消された古代を現在に蘇らせ、建国黎明に活躍した人々の英知と偉業に思いを馳せ、今の国民がその情報を共有することで、難題の多い未来に力を合わせ立ち向かうことができると思う。

つまり、過ぎ去った人間社会の時間による変化の後追いに留まらず、明日あしたに未来に向かって生かす手引きとして活用されることこそが重要である。歴史を指針として、同じ過ちを繰り返すことだけは何とんでも避けたいものである。

